

今日の福音は、「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。」ということばで始まっています。福音書の中でイエスが天の国について語られるとき、イエスは、天の国があるということを教えようとして語っているではありません。イエスが語られる天の国の福音の最大の特徴は、天の国とは、イエスを遣わされた父なる神からのわたしたちへの招待、招きであるということです。全ての者の創造主である父なる神は、わたしたちを天の国の喜びに招き入れるために御子イエスを遣わしてくださったということが、福音書全体の私たちへの中心的メッセージなのです。これこそが、イエス・キリストが私たちにもたらしてくださった福音であり、その福音を信じて、イエスによってもたらされた父なる神の天の国への招待を受け入れるということが、わたしたちのカトリック信者としての信仰そのものなのです。

このことを理解するために、マタイ福音書に語られているイエスの福音宣言の最初のおことばを思い起こしてみたらよいかも知れません。「悔い改めよ。天の国は近づいた」。イエスの公の活動に先立つこの宣言の中に、イエスがわたしたちにもたらしてくださったことの全てが明らかにされており、イエスがわたしたちに求めておられることの全てが表明されています。福音書の中に伝えられているイエスの全てのことばと業、そしてその十字架の死と復活は、「悔い改めよ。天の国は近づいた」というあの最初の宣言が述べていたことが、どのようにして明らかになったかということ語っているのです。福音書に語られている全てのことを通して、天の国はこの地上に生きるわたしたちの世界に近づき、もたらされたのです。そしてそれはわたしたち全ての者に対する創造主である神からの招きなのです。「悔い改めよ」とは、この地上に生きるわたしたちが、自分たちの思いと生き方を越えて、イエス・キリストによってもたらされた、この神からの招きに応えよとの呼びかけなのです。

けれども、今日の福音に語られている王の婚宴への招待のたとえ話は、イエスによってもたらされた天の国への招待が、イエスの時代のユダヤの人々によって、どのように迎えられたかということを示しています。王の再三の招待の呼びかけにも関わらず、最初に招かれた人々は、その招きを見捨てたばかりではなく、彼らを招くために遣いに出された王の家来たちに乱暴を働き、ついには殺してしまったと言われています。「悔い改めよ。天の国は近づいた」とイエスに先立って人々に回心を呼びかけた洗礼者ヨハネは、ヘロデ

によって牢獄に押し込められ、首を切られて殺されてしまいました。ヨハネはそのような生と死をもって、旧約の預言者たちがたどった運命を継承しているのです。旧約の預言者たちの時代から繰り返し、神の民である人々に伝えられていた、主である神からの招きはついに応えられることがなかったのです。

先週の日曜日に聴いた福音では、ぶどう園の主人とそのぶどう園の農夫たちのたとえ話が語られていました。収穫の実りを求める主人に対して、農夫たちは主人から遣わされて来た僕たちを次々に酷い目にあわせ、最後には主人の一人息子さえも殺してしまったと語られていました。今日の福音のたとえ話でも、王の息子である王子の結婚披露宴への招待は、そこに招かれていた人々によって、無視され、葬り去られてしまいました。このたとえ話が言おうとしていることは、わたしたちには理解出来るように思えます。旧約のシナイの契約によって神の民とされた、アブラハムの子孫であるユダヤの人々こそが、彼らの契約の主である神から遣わされたそのひとり子、メシア・イエスの天の国への招きに応じるべき人々であったのです。イエスはユダヤの人々が待ち望んでいたダビデの子、神からのメシアとしてユダヤの人々の中に遣わされたのです。けれども、福音書に語られているとおりに、イエスの時代のユダヤの指導者たちは、ついに、イエスによってもたらされた天の国の福音を受け入れることはありませんでした。福音書の中には、イエスとイエスがもたらそうとしたものを受け入れようとしない人々に対するイエスの痛切な嘆きが、そこそこに響いています。それは、イエスがお育ちになったナザレの村の人々に向けられ、イエスがその大いなる奇跡のみわざを行われた、カファルナウムを始めとする、ガリラヤの町々に向けられ、そして最後には神の都と呼ばれたエルサレムに向けられています。イエスがその人々の中に実現することを願った、父なる神から託された使命は、イエスの十字架の死によってその人々の中では実現されることはなかったのです。イエスの天の国への招きの福音はその人々によっては受け入れられることはなかったのです。

けれども、今日の福音のたとえ話は、イエスがそこに来られたユダヤの人々の中では受け入れられることがなかった、イエスがもたらされた父なる神の天の国への招きの信じがたい大らかさを告げています。イエスがもたらされた福音は、それが神からの招きであることによって、イエスの十字架の死という、これ以上にはない、人々の拒絶にもかかわらず挫折に終わることはなかったのです。このたとえ話を語られたイエスは、ご自分の死を越えて広がる、父なる神に託された使命の豊かな広がりを見ておられるのです。

招待された人々がその招待を拒絶することによって、イエスがもたらされた

天の国への招きとしての福音は、そのような招待があり得るということすら知る由もなかった、道行くわたしたちに向けられることになったのです。アブラハムも、モーセも、出エジプトの出来事も、シナイの神からの契約も知ることのなかった、縁なき者であるわたしたちに対して、イエス・キリストの父である神からの天の国への招きは及ぶことになったのです。旧約聖書と新約聖書に語られていることと、イエスの十字架の死と復活によってもたらされたこととを、一つながりの創造主である神の救いのみ業と信じる、わたしたちのキリスト教の信仰はこのようにして誕生したのです。

ここに集うわたしたち一人ひとは、それぞれの人生の途上で、それこそ通りがかりに呼び込まれるようにして、イエスがもたらした天の国の招待を受けたのです。旧約の律法の掟に従っているかどうかによって判断されていた善人悪人の区別を超えて、通りがかりの招待に応じるか否かによってだけで、わたしたちは信仰による神の喜びに満ちた宴の席に迎え入れられたのです。このことが、わたしたちにとって本当に喜びになるとき、わたしたちは婚宴の席にふさわしい礼服を着せ掛けていただくことが出来るのです。

「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」という今日の福音の最後のみことばは、天の国への招きとイエスへの信仰によってそれに応えたわたしたちの神秘を語っています。選ばれる人は、それにふさわしいから選ばれるのではありません。神の招きに応えて、その招待の席に入ることを選んだ者たちだけが、婚宴の席の喜びを味わうことが出来るのです。神の招きはそれに応える人にとってのみ招きとなり、その招きを受け入れた者たちが選ばれた者となることが出来るのです。わたしたちは普段着のまま喜びに満ちた婚宴の席に呼び込まれた者たちです。その喜びの席にふさわしい衣装を着せ掛けていただく恵みを願って、すなわち、招き入れられた喜びを知る恵みを願って、神の招きの永遠の宴に通じる、今日のミサをともにささげたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高